

「案山子」

さだまさしシリーズ第2弾  
『案山子』 作詞 さだ まさし

元気であるか 街には慣れたか  
友達できたか  
寂しくないか お金はあるか  
今度いつ帰る



城跡から見下ろせば 蒼く細い河  
橋のたもとに 造り酒屋のレンガ煙突  
この街を綿菓子に 染め抜いた雪が  
消えればお前が ここから出て  
初めての春

手紙が無理なら 電話でもいい  
金頼むの 一言でもいい  
お前の笑顔を 待ちわびる  
お袋に聴かせてやってくれ



元気であるか 街には慣れたか  
友達できたか  
寂しくないか お金はあるか  
今度いつ帰る

山の麓煙はいて 列車が走る  
木枯しが雑木林を 転げ落ちてくる  
銀色の毛布つけた 田圃にぽつり  
置き去られて 雪をかぶった  
案山子がひとり



お前も都会の 雪景色の中で  
ちょうどあの案山子の様に  
寂しい思い してはいないか  
体をこわしてはいないか

手紙が無理なら 電話でもいい  
金頼むの 一言でもいい  
お前の笑顔を 待ちわびる  
お袋に聴かせてやってくれ

元気であるか 街には慣れたか  
友達できたか  
寂しくないか お金はあるか  
今度いつ帰る  
寂しくないか お金はあるか  
今度いつ帰る



昔、大学に入って、練馬区練馬の5畳のアパートに食事付き36,000円で住むことを決め、一人帰っていくおふくろは、練馬大根の青い花を見て涙ながらに子供のことを思い出したとよく言ったものですが、当の息子は、やっと一人暮らしができると思ったのもつかの間、大蔵大臣の母が食事つきにしないという一言に抵抗できず、玄関が大家さんと一緒に、部屋が変則5畳で、北と西にしか窓がないトイレと流しが共同の暮らしに少しがっかりしながらも、これからたくさんのことをしなければならぬという気負った心でいたことを思い出します。

その後、満員電車に物おじしたり、財布を無くしたり、眼鏡を壊したり、大学生活になじめなかつたりしながら、都会の片隅で少しずつ何者かになっていったことを思い出します。

この歌は、都会に出る息子に父の立場から語り掛ける歌詞となっております。母としておなかを痛めた子が初めて自分と別の生活を送ることに、心配な面が多々ありであると推察します。

でも、大丈夫ですから。息子も娘も、何とかやっていくものです。

SOSの仕方だけ伝授してください。